

スピリチュアリティ文化と社会

渡 邊 太

はじめに

みなさま、こんにちは、渡邊です。よろしくお願ひします。本日は、「スピリチュアリティ文化と社会」という主題についてお話をさせていただきます。

「スピリチュアリティ」(spirituality)という言葉は、皆さん聞いたことがあると思います。スピリチュアリティという言葉は、宗教ではないけれども宗教のようなもの、宗教的な感性に関わること、人間を超えた存在や世界の神秘に触れる感覚に関わるような諸現象をあらわすために使われています。

科学が進歩し、理性の光で無知の闇を照らし尽くすという近代の欲望にしたがい発展してきた現代の社会において、なぜこれほどまでに神秘的な現象や非合理的と思える現象があいかわらず私たちの心をつかんでほさないのでしょうか。それはやはりどこかで、私たちが合理的な論理だけでは世界を把握し、自己の生を意味づけて生きていくことに難しさを感じていることを示唆しているのかもしれない。今日は、そういった事柄について考えてみたいと思います。

占いはなぜ当たるのか

さて、占いが好きな人も多いと思います。現代社会においては、占いは怪しげで非合理的なものと思なされる一方で、マスメディアにおいて非常に広く浸透している現象でもあります。毎日、朝のテレビ番組で「今日の運勢」がコンテンツとして盛り込まれています。「今日一番運勢が良いのは蟹座です」とか、「一番運勢が悪いのは牡羊座です」とか言われて、毎朝あわただしく通勤・通学の準備をしながら横目でチラチ

スピリチュアリティ文化と社会

ラと見て、なんとなく気にしてしまっている。この「なんとなく」というところがカギで、朝見たテレビの占いで「今日は運勢が良い」と言われるとなんとなくウキウキした気分になったり、あるいは「今日の運勢は最悪ですので、注意して一日過ごしましょう」と言われると、なんとなくどんより沈んだ気分になったりする。結構影響されるんですよ。

じつは、占いは本当に当たるんですね。テレビ番組のモーニング・ショーでの「今日の運勢」や、雑誌の後ろに載っている「今月の運勢」、そういうのを私たちはなんとなく見ています。それがけっこう当たってしまう。「占いが当たる」というのは、一体どういうことでしょうか。例えば、朝のテレビで「今日は何が良いことが起こるでしょう」「素敵な出会いがあるかもしれません」と言われると、なんとなく気分が高揚して、何か良いことがあるかもしれないという期待に満ちた一日を過ごす。そんなふうに期待に満ちた一日を過ごすということは、それ自体が幸せなことなのです。何か心が弾んだ気分になり、道端に咲いている雑草の花を見ても「あ、綺麗な花が咲いている！」と暖かい気持ちになったりしませんか？ 小鳥が鳴いていると世界に祝福

されているような気がしてくる。そうやって一日何となくウキウキした気持ちで過ごす、たとえ大して素敵な出会いがなかったとしても、特別に良い出来事がなかったとしても、やっぱりその日は良い一日だったと言ってよいでしょう。その意味で占いは当たっていたのです。

逆の場合もあります。逆の方は良くないのだけど、「今日の運勢は最悪です。おとなしく過ごしましょう」と言われると、一日中不安に怯えて過ごすことになります。友人との会話の中でも、相手の態度や言葉を気にして必要以上にネガティブに解釈してしまう。そうすると、一日あまり楽しく過ごせない。結果として占い通り、今日についてない一日だったということになってしまう。

予言の自己成就

占いが当たるのは、「言葉」というものに人間が呪縛されてしまうことによります。「今日のあなたはラッキーだ」と言われると、そう言われたことによって言葉は現実

スピリチュアリティ文化と社会

化する力を持ち始めます。幸い私たちは、忘却するという素敵な能力を持っているので、忘れてしまえば占いに左右されずに自由に主体的に一日を過ごすこともできる。だけど、ちよつとしたことが気になってしまふんですね。こういう社会心理のメカニズムは、「予言の自己成就」と呼ばれています。予言がなされたことでその後の行動が影響されて、結果的に予言された内容を実現してしまうというわけです。

有名なオイディプス王の神話があります。オイディプスの父親は、占い師からこう予言される。「あなたの息子はやがて父親を殺し、母を妻として娶るだろう」それを聞いた王である父親はその結果を避けようとして、息子を森の中に捨てる。王は自分が殺されることを回避するためにそうしたのですが、やがて成長したオイディプスは森の中で偶然にそれと知らず父と出くわし、諍いになって殺してしまう。そして王の位を継ぎ、美しい王妃（自分の母親）を妻として娶った。占いによって指し示された未来の状況を避けようとして行動した結果、かえって、避けたかった当の出来事が実現してしまうという悲劇です。これは、人間のコミュニケーションの構造や意識の構造の仕組みとして起こりうることです。

人類学者のレヴィストロースが、呪いについてこんな話をしています。なぜ呪いは効くのか。これも占いが当たるのと同じ話です。村の呪術師によって、ある男が呪いをかけられる。呪いをかけられた男は、呪術師の呪いが効くことを強く信じている。他の村人たちも深く信じている。そうすると、何が起こるか。「お前を呪い殺す」と言われた人は、自分はもう助からないだろうと絶望するし、周りの村人からも、もうあいつは助からないだろうと思われる。村人たちは彼をすでに死んだ者として、死を運命づけられた者として扱う。生きながらにして死者として扱う、あるいはその人に近づかないというような行動をとる。そのように周りから扱われると、相当心理的に追い込まれると思います。この状況はキツイ。やがて精神的に段々と参ってくる。そうすると、身体に不調をきたすかもしれない。身体が悪くなっても、「あいつは呪われているから」というので誰も助けてくれない。そしてどんどん衰弱し、やがて死に至る。全体を通して見ると、「あの男は呪われて死んだのだ」ということになる。

これは、呪いが神秘的な力を發揮してその人を死に至らしめたということではあり

スピリチュアリティ文化と社会

ません。この事例は、神秘的な力が実際には何一つ働いていなかったとしても、社会的な力とコミュニケーションの力によって呪いが現実的な力を発揮してしまうということを示しています。スピリチュアルな現象を考える時に、こういった観点から考えてみることも必要なのではないでしょうか。スピリチュアルな現象には、神秘的な力があるから価値があつたり、意味があつたりするのではなく、神秘的な力の働きをカッカに入れたとしても、社会的な力、コミュニケーションの力によってスピリチュアルな現象が現実を動かす力を持つということを考えてみる必要があるのではないか。オカルト的なもの、スピリチュアルなものを真に受けるのではなく、且つ、そういったものは幻想に過ぎないといって否定してしまうのでもなく、現実的に考えていききたい。私たちは、スピリチュアルなものの現実的な作用について現実的に考えていく必要があるはずです。

スピリチュアリティの概念

スピリチュアルな現象は、かなり幅広い領域に関わっています。宗教学者の島菌進氏は、スピリチュアリティ文化、スピリチュアリティ現象に関わるものとして、次のような言葉を挙げています。「魂」「靈性」「宇宙意識」「意識の変容」「心とからだの覚醒」「気づきの体験」「大いなる自己」(Higher Self)」「大霊 (Over soul)」「アニミズム」「自然の霊とのふれあい」「古神道」「気功」「癒し」「セラピー」「臨死体験」「輪廻転生」「ディープエコロジー」「ガイア」「意識の進化」(島菌進『スピリチュアリティの興隆』岩波書店、二〇〇七年、五頁)。このように、スピリチュアリティ文化には、様々な要素が含まれています。

近年では、「前世」や「オーラ」をテーマにしたテレビ番組が人気になりました。二〇〇九年に放送終了した『オーラの泉』は大変人気のあった番組ですね。雑誌でもスピリチュアル特集が組まれているのを見かけます。日経のビジネス雑誌の中でも、

スピリチュアリティ文化と社会

最近ではスピリチュアルな特集が組まれて、ビジネスを成功させるために「パワースポーツ」を訪ねようという話になっている。スピリチュアリティ文化は、かなり大衆的な広がりをもつと言えます。

また、「ジャパニメーション」(ジャパン+アニメの造語)と呼ばれるような、世界的に高く評価されている日本の漫画文化やアニメ文化の中にも、スピリチュアルな感性が色濃く見られる作品がたくさんあります。特に八〇年代以降の作品に顕著です。メジャーなところでは、宮崎駿監督の『風の谷のナウシカ』という作品があります。皆さん、ご覧になりましたか？ 人気のある作品なので、多くの人が一度は観たことがあると思います。『風の谷のナウシカ』という作品で描かれる世界には、宗教的な終末論の雰囲気濃厚に漂っています。終末論というのは、この世界がやがて終わりを迎え、その後に神の国(神の支配)が始まるという思想で、この思想の肝心なところは、救済されるためには現在の秩序がいったん破滅を迎えなければならぬということにあります。救済のためには、まず破壊されなければならぬというのが終末思想です。『風の谷のナウシカ』の物語世界の設定は、核戦争によって文明が一度崩

壊した後の世界ということになっています。物語の展開の中では、文明崩壊後の世界において、人々が自然と共に生活を営んでいるのですが、その世界が再び破滅を迎える可能性が示唆されながら、物語が展開していくわけです。文明と自然の対立という主題を軸に、文明の崩壊が示唆される。宮崎駿監督は日本のアニメーション作家として国民的な存在と言えらると思います。そういうメジャーな作家の作品に、スピリチュアルな要素が強く見られるのです。

また、『風の谷のナウシカ』と同じ一九八〇年代の作品として、大友克洋氏の『AKIRA』という漫画があります。アニメーション作品として映画化もされて、国際的に高い評価を得ました。『AKIRA』という作品も、一度核戦争によって崩壊した後の東京が舞台になっています。『AKIRA』では、超能力も重要なテーマとして扱われています。超能力を使うことのできる登場人物たちは、言葉を媒介とせず直接的にコミュニケーションを交わすことができる。意識と意識とが直接通じ合う。そういうモチーフが見られます。超能力という主題は、『風の谷のナウシカ』にも見られるものです。

スピリチュアリティ文化と社会

このように、スピリチュアリティ現象は大衆文化の中に非常に強力に浸透している。それから先程、ビジネス雑誌のことを言いましたけれども、ビジネスマンを対象とした自己啓発の書籍の中にも、スピリチュアルな内容を含むものが一定量流通しています。資本主義とスピリチュアリティの関係も後に議論しますが、非常に密接な関係があると言えます。一時期、洗脳やマインドコントロールであるとして批判された「自己啓発セミナー」の手法も、一部では既に企業の新人研修・社員研修の中に取り込まれています。

スピリチュアリティ文化の源流

さて、ここで、幅広い内容をもつスピリチュアリティ現象について、概念的に整理してみたいと思います。スピリチュアリティという言葉に関連して、十九世紀にアメリカやイギリスでスピリチュアリズムという言葉が現われました。十九世紀後半、アメリカやイギリスで、超能力や心霊と交流したり、霊的な存在の言葉を聞いたりする

能力を持つスピリチュアリストたちが人気者になり、心霊現象が流行しました。そして心霊現象を真面目に、科学的に研究しようという動きが現れて、心霊現象研究会などの組織が設立されています。シャーロック・ホームズの著者コナン・ドイルや哲学者のアンリ・ベルクソンが心霊現象に非常に強い関心を持っていたようです。有名なスピリチュアルカウンセラーの江原啓之氏は、イギリスのスピリチュアリズムを学んでいます。そして、同時代的に日本でも当時、明治から大正にかけて心霊現象というのが流行しています。有名な「千里眼事件」では、当時の東京大学助教授が千里眼（超能力の一つで、遠くのものが見通せる、あるいは見えないはずのものが見えるという能力）に関する実証的な実験を行ない社会現象になりました。夏目漱石には『行人』という面白い奇妙な小説がありますが、その中で登場人物たちが心霊現象について語り合う場面があります。それほどに、明治・大正期に日本でもスピリチュアリズムが流行っていたのです。その後、スピリチュアリズムはしばらくはマイナーなサブカルチャーとして潜んでいたわけですが、再び世界的に流行し始めるのが、一九七〇年代以降です。アメリカやヨーロッパで「ニューエイジ」(New Age)と呼

スピリチュアリティ文化と社会

ばれる現象です。

ニューエイジとは、ヒーリング、代替医療、東洋神秘主義、東洋思想、ヨガ、当時出現した「カルト」と呼ばれる新宗教運動、前世と生まれ変わりの思想など、多様なスピリチュアルな関心を指す概念です。その中には、かつては死者の霊との交流であったのが変形して、宇宙人との交流（チャネリング）を実践するチャネラーと呼ばれる人たちも含まれます。これらニューエイジ現象は、五〇年代から六〇年代にかけてアメリカの公民権運動、それからベトナム反戦運動などの社会運動とも共鳴しながら、「ヒッピー文化」「ヒッピー運動」と呼ばれる、西洋近代文明に対する反発を持つ若者たちの新しい社会運動として展開されていきました。ヒッピーたちは、反文明的な暮らしを営むべく山奥などに「コミュニティ」と呼ばれる共同体を作り、できるだけ原始的な生活を営もうとした。そのヒッピーたちは、ニューエイジの文化や思想に強い関心を持っていました。有名なロックバンドであるビートルズのメンバーも、一時期、東洋神秘主義やニューエイジ思想に関心をもち、インドを訪れて影響を受けていました。

ニューエイジ現象は、当時の若者文化に大きな影響を与えました。一九六九年にアメリカで「ウッドストック」という大規模な野外ロックコンサートが開かれました。「ウッドストック」は、現在のフジロックフェスティバルやライジングサンロックフェスティバル、サマソニックのような若者たちが集って熱狂するロックフェスティバル（いわゆる「フェス」）の起源となった伝説的なイベントでした。「ウッドストック」に集まったのは、ロック音楽を愛好する若者たちですが、同時に彼ら彼女らはニューエイジの神秘主義的な文化にもおおいに関心を寄せていました。「ウッドストック」の記録映画を見ると、ステージでロック・ミュージシャンが演奏して若者たちが熱狂するのですが、その後にインドからやってきたグル（宗教的指導者）がステージに上がって、若者たちに向かってスピリチュアルなメッセージを説法している場面があり、グルもロック・ミュージシャンと同じように若者たちに熱狂的に受け入れられていました。また、ロックの音楽に耳を傾けてステージに向かって熱狂する若者たちがいる一方で、後ろの方ではヨガをしている一群のグループがあるといった具合に、ロック文化とニューエイジ思想とがリンクしていたのです。当時のロック好きの若者

スピリチュアリティ文化と社会

私たちは、真面目に近代文明の行き詰まりに対して、どのような新しい価値観が可能かを模索していたという面があったのだと思います。

日本では、一九八〇年代に登場した「精神世界」という言葉がニューエイジに該当すると思います。大きな書店に行くと「精神世界」というコーナーがありますね。そこには、スピリチュアリズムからニューエイジに至るまで、スピリチュアリティに関わるさまざまな分野の本が並んでいます。江原啓之氏などの人気も含めて、今日のスピリチュアリティブームは、基本的にニューエイジや精神世界の流行の延長線上にあると言つてよいと思います。また、特に近年、スピリチュアルな感性・感覚が強調されるのは医療の分野です。「スピリチュアルケア」という言葉が導入されて、精神的な部分や魂に関わる部分でのケアが、例えば終末期医療や緩和ケアにおいて必要であるということ、スピリチュアリティが注目されています。

個人主義

スピリチュアリティ概念については、宗教研究の中でもさまざまな見解があり議論が交錯するところですが、議論されているところを集約すると、スピリチュアリティという概念は宗教と対比して使われることが多いようです。スピリチュアリティも広い意味での宗教性に関わるものですが、通常私たちが「宗教」という言葉を使う時には、制度化された宗教、教団としての宗教、宗教組織、宗教集団などをイメージします。それに対してスピリチュアリティ文化の特徴とされるのは、どちらかと言うと「個人」に関わるもの、個人主義的なものです。スピリチュアルな実践は、宗教団体に入らなくてもできます。個人的に瞑想を実践するか、パワースポットに一人で行くとか、別に教団に入信しなくてもスピリチュアルな文化に関わることは可能です。むしろ、スピリチュアリティ文化では個人主義的であることが重要となります。なぜかと言うと、近代社会の多くの現代人にとっては、宗教組織・宗教教団は、いささ

スピリチュアリティ文化と社会

か不信の眼差しをもって見られる傾向があるからです。宗教学者の西山茂氏は、日本人の宗教性の特徴を、「教団嫌いの神秘好き」と一言で巧みに表現しています（大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』有斐閣、一九八八年、二〇六頁）。教団という何だかいかかわしくて怪しげな、洗脳されてしまいそうな、ネガティブなイメージがある。それに、入信すると献金や奉仕活動が義務付けられるなど、いろいろ面倒くさいこともつきまとう。そういうのは嫌なのだけど、その一方で、スピリチュアルなものや神秘的なものには関心がある。それが日本人の宗教性である、と言うわけです。ただ、西山氏はこれを日本人の宗教性の特徴とみていたのですが、案外にアメリカやヨーロッパなどのいわゆる先進諸国においても、制度宗教・教団宗教に対する不信感が一般的に見られることが指摘されています。制度宗教は個人の神秘的な感性、スピリチュアルな感性をむしろ妨げてしまう、そういうイメージが欧米諸国においても多くの人に共有されている。そうであるが故に、個人的な関わりを特徴とするスピリチュアリティ文化が、多くの人々にとって魅力的に映っているのでしょうか。

このように宗教とスピリチュアリティには、対比的にとらえられる面があります。

そして、宗教の場合には、「神」のような超越的な存在によって救済される、ということが主題となります。それに対して個人主義を特徴とするスピリチュアリティ文化においては、「神」による救済ではなく、スピリチュアルな体験による「自己」の変容、自分自身がスピリチュアルな体験によってどう変わるかが主題となります。スピリチュアリティ文化においては、個人的な感性を強調するため必然的にその焦点は自己へと向かう。自分自身に向かっていきます。この点において、おそらく自分探しの文脈とスピリチュアリティ文化との親和性が説明できるのではないかと思えます。

一九八〇年代以降、「自分探し」「私探し」ということが若者文化の一つの特徴と言われている。これもさまざまな社会的な背景があるのですが、「私とは何か」「自己とは何か」ということが自明ではなくなっているということです。青年期が長期化しているということも関わって、二十歳を過ぎても「自分が何者であるか」という明確なアイデンティティを持つことが難しい状況がある。そこで、「本当の私」を見つけるために「自分探しの旅」(センチメンタル・ジャーニー)に出るわけですが、そうやって自分探しの放浪を経て最終的に、前世や彼岸などのスピリチュアルな領域に辿

スピリチュアリティ文化と社会

り着くということもあるでしょう。

スピリチュアルな体験は、個人的な体験、あるいは個人的な瞑想や修行の実践によって得られるものです。あるいはそれはしばしば商品の購入という形で行われます。パワーストーンやアロマオイルをはじめとする様々なヒーリンググッズがあり、この商品を購入すれば「癒し」が得られるとして売り出されています。商品を購入して一時的な「癒し」とスピリチュアルな体験を手に入れる。お金を払って物を買うのは、極めて個人的な体験で、かつ気軽にできることです。もしこれが宗教団体に入信するとなると、いろいろな面倒くさいことがあります。教団の人間関係に縛られる上に、様々な宗教的義務を課せられる。いろいろ守らなければならないことがある。「ただ癒されたいだけなのに」「ちょっとだけスピリチュアルな体験をしたいだけなのに」という人にとっては、教団に入信することは非常に敷居が高い。それに比べると物を買うということは気軽に試してみることができる。

したがって、個人的な体験としてのスピリチュアリティ現象には、気軽に近づきやすいという特徴がある。宗教が「神」という強い超越性を持つ文化であるとすれば、

それとの対比でスピリチュアリティ文化は、たとえ超越的な存在との一体感みたいなものが主題となる場合であっても、それほど他者の超越性は強調されずに、むしろスピリチュアルな体験によって自己がどう変わるかということに強調点が置かれる。つまり、宗教の「強い超越性」に対して、スピリチュアリティ文化の特徴は「弱い超越性」と言える。「弱い超越性」ゆえに、近づきやすくもある。「なんとなく、スピリチュアル」とでも言うべき緩やかなものだからこそ、ここまでの大衆的な広がりを持ちえたと考えられます。

カルト化の危険性

宗教研究においては、スピリチュアリティ文化のもつ拘束力の弱さや、「弱い超越性」という面は比較的肯定的に評価されてきました。それは開かれたスピリチュアリティとして、人間の精神文化を豊かにするものであると語られる。だが、その一方でスピリチュアリティ文化がもつリスクも指摘されています。社会学者の小池靖氏は次

スピリチュアリティ文化と社会

のように指摘しています。「スピリチュアリティによって、人間解放が起こることもあれば人間疎外が起こることもあり、その両面を見ていく必要がある」(小池靖「精神世界におけるカルト化」伊藤・樫尾・弓山編『スピリチュアリティの社会学』世界思想社、二〇〇四年、二二六頁)。スピリチュアリティ文化には開かれた宗教性としてポジティブな面もあるけれど、それに伴うリスクもあるので、ネガティブな面にも注目しなければならぬということです。

スピリチュアリティ文化のリスクの一つとして指摘されているのは、カルト化する危険性です。カルトとは、反社会的な価値観を持っていたり、反社会的な活動を実際に行なったりする教団を指す言葉です。当初は緩やかな文化現象であったものが、いつのまにか先鋭化して、ラジカル化して、カルト宗教に変質してしまう。そういう危険性は、スピリチュアリティ文化に全くないとは言えない。若者がスピリチュアルな関心を抱き、その結果としてカルト的なものに取り込まれていく。その一つのモデルケースと言うか、極限的なケースとしてオウム真理教があるとは言えないでしょうか。

オウム真理教に入信した若者たちの多くは、八〇年代の精神世界やニューエイジ的な文化に親しみを持っていました。元オウム信者の証言によれば、多くの信者が入信する前に『風の谷のナウシカ』が好きでよく映画を見ていたそうです。また、大友克洋氏の『AKIRA』は、ほとんど全ての信者が入信前に一度は見ていたそうです。それから、チベットでフィールドワークをしてチベット仏教のグルに弟子入りして修行した宗教学者の中沢新一氏が、その体験について書いた『虹の階梯』という本も入信前のオウム信者の多くに読まれていたそうです。信者たちは、入信前から超能力や修行による神秘体験に関心を持っていました。オウム真理教が多くの若者を惹きつけたのは、それまで本を読み、関心を持っていたことが、教団に入れば実際に体験できるということでした。

オウムの修行システムは、こういう言い方で誤解を招くといけません、結構よくできていたみたいです。方法を合理化して神秘体験を効率的に引き起こす、そういう修行のシステムをどうも開発していたらしい。一説によると、七〇年代から八〇年代にかけてアメリカで急速に発展を遂げたニューエイジ的東洋神秘主義のラジニーシ教

スピリチュアリティ文化と社会

団にかつて所属していた信者が、オウム真理教にラジニーシの修行システムを導入したと言われています。さらには、LSDなどの薬物を合成し、ヨガの修行と結びつけて、神秘体験をいわば促成栽培的に引き起こすということもしていたようです。一時、私もフィールドワークでオウム真理教の道場へ行き、ヨガの修行を体験したことがあります。幸い入信はしませんでした。ごく短い期間の修行体験でしたが、よくできているという印象がありました。ヨガをしているうちに光が見えてきそうな感覚がある。そういうことって、結構簡単に起こるんですね、恐らくヨガと呼吸法によって。

だからといってそれを神秘体験として殊更にありがたがる必要はなくて、脳のニューラルネットワークが一定の状態になると自動的に起こる感覚体験なのだと思います。しかし、そこでオウム真理教はこういうロジックを使うわけです。ヨガをして七色の光を見たとすると、そのとき見た光の光景こそがリアルな世界である、と言うわけです。普段私たちが覚醒していると思っっているのは実は幻影に過ぎず、真のリアリティは神秘体験をした時に束の間かいま見えるものである。こういうふうに、リアリ

テイの定義を反転させるわけです。

人間が愚かदैいつまでたつても悟りを開くことができないのは、私たち現実と思っている世界が実は幻にすぎないということに気づかず、それを真実だと思い込んでゐるからだ、というわけです。これは単純なロジックですが、実際に神秘体験をした人にとっては説得力を持つてしまふ。というのは、神秘体験には実感的な身体的リアリティをとまなうからです。他人が「でもそれは幻覚でしょ」と言つても、「いや、そうじゃない。私は体験したのだ。あなたは体験していないからわからないだけだ」と反論されると、なかなか説得できない。「じゃあ、あなたもやつてみればいいじゃない」と言われてうつつかりやつてしまふとハマツてしまふ、ということにもなりかねない。なかなかよくできたロジックです。

神秘体験の意味づけ

神秘体験については、脳神経科学者アンドリュウ・ニューバーグらの研究グループ

スピリチュアリティ文化と社会

が、瞑想の達人のような宗教家の協力を得て、こういう面白い実験をしています（ア
ンドリユー・ニューバーク他『脳はいかにして神を見るか』PHP社、二〇〇三年）。
宗教家が宇宙との一体感を体験しているような瞑想の状態に達した時、脳の状態がど
うなっているかを測定するのです。そうして測定してみると毎回だいたい同じ状態に
なっている。ニューバークらの研究によれば、瞑想中に、「方向定位連合野」という
身体の姿勢を保つのに関わる領域への感覚入力が遮断された状態になっている。その
状態の時に、宇宙と一体化するとか、自己と非自己の区別が溶解するような神秘体験
・内的体験の意識状態が生まれる。つまり、それは脳の機能として合理的に説明でき
る状態であるということ。神秘体験も、そのように合理的に理解しておけばいい
と思います。

ところが、オウム真理教の場合にはその神秘体験を、尊師、グルへの絶対的な服従
へと結びつけてしまったのです。言い換えると、これはスピリチュアルな関心をグル
という、「強い超越性」をもつ存在と結びつけたということです。スピリチュアリテ
イ文化は本来「弱い超越性」を特徴とするものであったはずですが、グルへの服従と

いう形で「強い超越性」と結びつけられた時にカルト化する。閉鎖的なシステムに導かれてしまうという危険性があると言えます。

脳科学者の苦米地英人氏は、スピリチュアルな関心を煽ることの危険性に関して江原啓之氏を批判しています(苦米地英人『スピリチュアリズム』にげん出版、二〇〇七年)。苦米地氏によれば、江原氏がテレビで伝えるメッセージは、一種の催眠術のようなもので、視聴者のうちの被暗示性の強い人々はそういうメッセージに強く影響を受けてしまう。でも、テレビは一方的にメッセージを送るだけで応えてはくれません。こちらからテレビに向かつて話しかけても当然何の反応もありません。そうすると、スピリチュアルなメッセージを受け取った被暗示性の強い人たちは、受け皿を求めてどこかに行かざるを得ない。そういう人たちを手ぐすね引いて待っているのがカルト宗教だったりするのです。

宗教学者の弓山達也氏も、次のように指摘しています。「スピリチュアルな救いを求める人々が、寺社の門も叩かず、『カルト』に巻き込まれているというのが、宗教界の最大の悲劇であろう。また生きる意味や死の意味を学校も病院も家庭もうまく伝

スピリチュアリティ文化と社会

えられなくなっているという点で、スピリチュアルな希求を満たす体制は教育にも、医療にも、そして社会にもない。そうすると、スピリチュアリティが商売に利用され、侵害される危険性は今後も続く。その意味で現代は『スピリチュアリティの危機』の時代ということができよう」(弓山達也「スピリチュアリティの目覚めとその危機」伊藤・榎尾・弓山編『スピリチュアリティの社会学』世界思想社、二〇〇四年、二〇四頁)。

伝統的な寺社や教会がスピリチュアルな関心の受け皿として機能していないため、スピリチュアリティ文化に関心を持つ人々が熱心に勧誘活動をおこなうカルト団体に取り込まれてしまっている。これがスピリチュアルティ文化をめぐる悲劇であると弓山氏は指摘します。

新自由主義を補完するイデオロギー

もう一つ、別のリスクも指摘されています。それは、スピリチュアリティ文化が個

人主義的なものであるということに関わるリスクです。ヒーリングによる癒しで心の安泰を得ることや、スピリチュアルな体験によって自己を変容させることは、スピリチュアリティ文化の個人主義的な特徴をあらわしていますが、個人的な体験を強調するスピリチュアリティのブームは、個人の「自己責任」を強調する新自由主義的（ネオリベラル）な価値観と親和性が高いのではないか、という問題です。

社会学者の櫻井義秀氏は、スピリチュアリティ文化が格差社会を補完するようなイデオロギーとして機能してしまうことを指摘しています。「かけがえのない自分や一度きりの人生、大事な人との関係がスピリチュアルに語られる一方で、格差社会は自分の面倒を自分で見られない人を容赦なく切り捨てていく。個人の尊厳が社会権として十分補償されない社会においてスピリチュアリティがもてはやされるといのは、結局の所、新自由主義経済・国家体制に即応した文化形態でしかない」（櫻井義秀、『現代日本社会とスピリチュアリティ・ブーム』櫻井義秀編『カルトとスピリチュアリティ』ミネルヴァ書房、二〇〇九年、二五三頁）。櫻井氏は、スピリチュアリティ文化が新自由主義を補完する機能を担ってしまうことを批判的に捉えています。

スピリチュアリティ文化と社会

「格差」「貧困」という言葉が、二〇〇〇年代以降リアリティを持って語られるようになっていきます。皆さんも金融恐慌以降、就職難と言われている中で、この先どうやって生き延びていくかという不安を抱えて眠れぬ夜を過ごしていることでしょう。なかなかやっかいな状況です。高度経済成長以降、豊かな社会が実現したと考えられてきましたが、その豊かさを実現したはずの社会において、「貧困」が改めてリアリティを持つようになってきた。プロレタリア文学の傑作である小林多喜二『蟹工船』が、二〇〇〇年代後半に再びベストセラーになるという状況が到来しています。日雇い派遣の若者たちが『蟹工船』を読み、ここに描かれているのは自分たちの姿だと思つたそうです。ネットカフェ難民、野宿者、若年ホームレスもすでに他人事ではないという状況に至っています。

格差社会の中で「負け組」と呼ばれる人たちが、スピリチュアルなメッセージによって一時的になだめられているというような状況があるとすれば、それは社会的な矛盾に目を向けることを回避させてしまうことになります。スピリチュアリティ文化には、社会的な矛盾や問題から目を背けさせるイデオロギーとして機能する可能性が確

かにあります。

スピリチュアルな文化は、目に見えない実在、死後の世界、生まれ変わりなど、私たちが客観的なリアリティとしては捉えられない、目に見えない存在との関わりにおいて、この現実を説明するものです。例えば、「今あなたが苦しいのは前世でこういうことがあったからです」というように説明してくれる。これが非正規雇用の労働者に向かって、「今あなたにフリーターの仕事しかないのは、非正規雇用の仕事しか見つからないのは、風水が悪いからです」などと説明されると、それなりに慰められるんですね、困ったことに。「困ったことに」と言っていていいと思いますけれども。

人間は意味を求める生き物であり、宗教の機能の一つは不幸を意味づけることにあるとマックス・ウエーバーは指摘しています。どんな不幸であっても意味づけられれば、それだけでちよつとは救われる。慰められるということがあります。我が身に降りかかった不幸が何の理由もない、どのようにしても説明されないというのは相当キツイことです。理由のない苦しみは、カフカ的な不条理な苦しみとして耐え難いものです。だから、どんなことでもいいから何か理由を求めようとしてしまう。その時

スピリチュアリティ文化と社会

に、風水が悪いとか、前世の行いが悪かったとか、ご先祖の行いが悪かったとか言われると、例えどんな説明であつても、説明されたという言語行為において、幾分かは気持ちが悪くなるでしょう。説明されないよりはマシなのです。尚かつ、「だからお墓参りをしましょう」「家の家具の配置を換えるといいですよ」というように解決策を指示されると、それだけで救われたような気分になつてくる。逆に言うとそのように慰められることによつて、今の自分の境遇に安住してしまふ、という面もあるので

クリエイティブ労働

スピリチュアリティ文化と資本主義的な経済の関係性というのは、相当に込み入つていて、グローバルな資本主義の最先端において、スピリチュアリティ現象が突如として出現するということも結構あるのです。今日の資本主義は高度に発展した段階に到達しています。高度経済成長をもたらしたのは、第二次産業を中心とした産業資本

主義でした。産業資本主義の段階は、工業製品、実体的な物を生産して、物売つて、富を造り出し豊かになるという経済システムです。さらに資本主義が発展していくと、第三次産業、サービス業、情報産業が中心の経済システムへと移行します。そうすると、実際に物を作る、製品を作るのではなくて、情報やサービスを作り出すということが価値を生み、富を創り出すようになる。第三次産業中心の資本主義は、「記号資本主義」や「認知資本主義」と呼ばれています。

「認知資本主義」というのは、面白い表現です。「認知」とは、人間が見たり聞いた感じたりする、外界を認知する、そういう能力です。いまや、認知能力を働かせることそれ自体が新しいアイデアを生み出し、価値を創造し、そのままお金になる段階に資本主義は到達していると言えます。言ってみれば、人間の脳、神経系の機能が富を増殖するために総動員されている、そのような段階にまで至った。

情報産業で働く知識労働者たちは、私自身もそうですが、四六時中、グローバルなインターネットにログインし、四六時中、新しいアイデアを作り出そうと脳味噌をフル回転させる。そういう働き方が常態となっています。あるいは、他者とのコミュ

スピリチュアリティ文化と社会

ニケーションによって新しいアイデアを作り出す。そのためには、人とおしゃべりをする事、同僚とおしゃべりをする事、新しいアイデアを生みだすきっかけになるわけで、そうすると、何気ない雑談をすることさえも仕事になってしまっています。「認知資本主義」においては、雑談さえも労働である、ということですね。

経済学者のリチャード・フロリダは、知識や情報を生み出す科学者、情報に関する技術者、芸術家、デザイナー、エンターテイナーなどの知識産業、情報産業に働く人々を「クリエイティブ階級」(creative class)と呼んでいます(リチャード・フロリダ『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社、二〇〇八年)。「階級」という言葉は、これらの職業に従事する人々が共通の文化的な特徴と、共通の利害関心を持っているということの意味します。一般的に日本語で「クリエイティブな仕事」という言い方でイメージされる仕事と思っただけならいいと思います。

フロリダによれば、クリエイティブ階級で働く人々は、クリエイティブ性を最大化するために仕事とライフスタイルを融合させている。クリエイティブ階級とは、例え趣味であっても、その趣味を仕事のために活用するような、仕事のために新しいア

アイデアを生みだすような趣味を好んでするという、そういう人々です。我が身をふり返ってみると、確かにそういう面もあると思います。私たち研究者は本を読むのも仕事ですが、普段は小難しい学術書などを読み、疲れると気晴らしに小説などを読むのですが、そのとき小説でも何かしら自分の研究に役立つかもしれない小説をつい選んでしまう。自分の仕事のクリエイティビティに関わるかもしれないと思い、趣味と仕事の境目がよく分からない状況を生きている。

知識労働者、情報労働者たちは、クリエイティビティを常に活性化させることを仕事の中で求められつつ働いています。フロリダは、クリエイティビティは誰の中にも無限に潜んでいると言います。第二次産業が資源を用いて製品を作り、価値を生み出す段階だったとすれば、「情報資本主義」「認知資本主義」の段階は、資源に代わってクリエイティビティによって価値を生みだしていく、そういう段階です。誰もが潜在的にもつ無限のクリエイティビティを活性化させて、価値を創り出すことを期待されているのです。

このことはスピリチュアリティ文化のキーワードの一つである「自己実現」と深く

スピリチュアリティ文化と社会

関わっています。「自己実現」という言葉は心理学者のアブラハム・マズローが強調した概念です。マズローは、次のように言います「人は、自分がなりうるものにならなければならぬ。人は、自分自身の本性に忠実でなければならぬ。このような欲求を、自己実現の欲求と呼ぶことができるであろう」(アブラハム・マズロー『人間の心理学』産業能率大学出版部、一九八七年、七二頁)。

自分が成りうるものに成りたい欲求が自己実現の欲求です。だから、自分がさまざまな可能性を潜在的に持っているとするれば、その可能性は努力することによって開花させなければなりません。マズローにならえば、潜在している自己の可能性を実現(actualize)することが人間にとつての幸せであると考えられます。

この「自己実現」の考え方がビジネスの分脈と結びつくと、絶えず自己の能力を自己開発し、潜在的な可能性をアクチュアライズすべく自己啓発するということとなります。「自己実現」の概念は、自分の眠っている能力を徹底的に開発し続けなければならないという強迫観念として作用してしまふ。何もせず、ただぼんやり過ごしていると時間をもつたない気がしてしまふ。例えば、休みの日にぼーっとして過ごすと

時間を無駄にした気がするから、英会話教室でも通ってみる。何もなくてもいいのだけど、暇があれば自分の能力を開発しなければ、とつい思ってしまう。そういう傾向性が今日の経済システムの要請として出てきています。

何もしていないことに焦りを抱いてしまうのは、今日の資本主義がそうした段階に到達していることの必然であると言えます。そこには、絶え間なく「自己実現」のために努力し続けなければいつ仕事を失うか分からない、という雇用の不安定性が背景としてあります。リチャード・セネットによれば、現代の労働者に共通する感覚としてあるのは「不要とされる不安」です(リチャード・セネット『不安な経済／漂流する個人』大月書店、二〇〇八年)。「不要とされる不安」が現代の労働者に共通するメンタリティであり、私たちは、いつ自分が職場で「不要」とされてしまうか分からないという不安を絶えず抱きながら働いている。今日、有期雇用(期間限定の雇用)が一般化しつつあります。派遣社員であれば、一年や六ヶ月、短い場合は三ヶ月や一ヶ月といった雇用期間で雇用契約を結んでいる。そして職場で労働力が不要になったら「来月は契約を更新しません」という形で雇い止めにされてしまう。あなたの能力

スピリチュアリティ文化と社会

は、もうこの職場では不要だ、ということですよ。

これは労働者にとつては、相当恐いことなんです。現代人にとつて労働は自分の価値を証明する大きなウエイトを占めているので、不安定な状況で働く人々は、絶えずそのような不安を抱いて生きているということになります。その不安の中に、スピリチュアリティな関心が育まれる、文化的な土壌というものがあるのかもしれない。

スピリチュアル資本主義

さらに、企業が積極的にスピリチュアルな感性を利用することも指摘されています。SONYの社内では一九九〇年代に超能力開発に熱心だった時期があったそうです。また、有名なコンサルタント会社がかきわめてスピリチュアルなメッセージを経営言説として発信しているという状況があります。自己啓発セミナーのメソッドを応用した社員研修の中でも、スピリチュアルなメッセージが多用されています。「宇宙意

識とビジネスの融合」や「エネルギー注入で社員のやる気を引き出す」というようなことが言われています。「イメージは必ず実現する」というポジティブ・シンキングのメッセージもそうですね。

こういったメッセージがスピリチュアルな感性と適合するような形で、尚かつ、企業の営利活動に向かわせるドライブとして利用されている。ジャーナリストの斎藤貴男氏は、スピリチュアリティを利用する資本主義に対して、次のように批判しています。「従業員が無我執、かつポジティブ・シンキングで働いてくれれば生産性が上がるから、管理する側はオカルトを説く。従業員たちはと言えば、無理を重ねたり、酷い目に遭った時の精神的な痛みを和らげるため、無意識のうちに、これを受け入れる。本人にとつては現実逃避のつもりでも、とどのつまりは現実を生きるための処世術なのである」(斎藤貴男、『カルト資本主義』文藝春秋、一九九七年、三七七頁)。

過労死しそうなほどサービス残業が続いて、もうダメだと思った時に、「ダメだと思うからダメなんだ。ポジティブ・シンキングで行こう」と自分を慰め、励ます。その結果、過労死してしまうかもしれない。これは怖いですよ。日々、過労死しそうな

スピリチュアリティ文化と社会

状態で働いている私たちにとって、スピリチュアルなメッセージを受け入れるくらいしか心の穏やかさが得られないというような状況ですね。

消費の幻想

さて、このように一方で生産の場面においてスピリチュアルな関心が利用されていると共に、他方で消費の場面においても、スピリチュアリティ文化が資本主義と絡み合っています。商品を購入するという形でスピリチュアリティ体験をするという話を先程しましたが、スピリチュアルな消費の極限的なケースというのは恐らく靈感商法的なものです。呪いや先祖の祟りなど、スピリチュアルな不安をあおり立てることによって高額な商品売りつける。皆さんも気をつけてくださいね。将来、小銭を稼ぐようになると誘惑する魔の手がたくさん忍び寄ってきます。

それから、代替医療 (alternative medicine) と呼ばれる分野にもスピリチュアルな商品がけっこう蔓延しています。とりわけ近代的な医療ではすぐには完治しないよう

な症状、例えば、アトピー性皮膚炎をめぐって、スピリチュアルな商売が流行しています。アトピーの場合、生活習慣にもかかわるから病院に行ってもすぐには良くならず時間がかかる。そこにつけこまれるわけです。アトピーに効くとされる色々な健康食品、石鹸、化粧品、なんとか波動水等々、多くの怪しげな商品が出回っています。

しかも、運が悪ければ、疑似医療的な商品に手を出すことによって、適切な治療が妨げられてかえって症状が悪化するケースもあるようです。だから、スピリチュアルな商品には気をつけなければならぬという面もあると言えます。

スピリチュアルな商品が魅力的に見えてしまうことに関しては、実は、ことさらにスピリチュアルな商品でなくても、商品一般が一種のスピリチュアルな幻想性を帯びているとも考えられます。今日の消費文化においては、商品はほとんど幻想的な価値によって購入されています。ある商品を買うのは、その商品が便利で実用的だからという使用価値もあるわけですが、私たちが商品に見出す価値はそれだけではありません。その商品を買うことによって生活が豊かになるとか、楽しいハッピーな毎日をごせるといった幻想的な価値(記号価値)があります。

スピリチュアリティ文化と社会

例えば、Apple社のiPhoneやiPadといったデジタル製品。あの種の商品が欲しくなるのは、その商品を買ったら毎日が楽しくなるかもしれないという幻想が駆り立てられるからなのですよ。企業がモノを売る時にも積極的に、そういう幻想を煽りたてているでしょう。また、ファッションに関わるところでは、「ブランド」が強力な幻想的価値になります。ブランド商品を購入することによって、一段階ランクアップした私、というような自己の変容を楽しんでいる。

ナイキというスポーツブランドがありますが、ジャーナリストのナオミ・クラインは、ナイキ社が提示している価値にニューエイジ思想の影響が見られることを指摘しています(ナオミ・クライン『ブランドなんか、いらない!』はまの出版、二〇〇一年)。ナイキ社が提示する価値は、スポーツによる活力ある豊かな生活の実現というようなことですね。ナイキ社は、単に靴を売っただけではなく、ライフスタイルに関わる幻想を売り物にしている。だからこそナイキのロゴである「スウォッシュ」のマークは、若者たちにとって非常に魅力的なアイコンになっています。ビックリするような話ですが、アメリカの若者たちの中には自分の足のくるぶしに「スウォッシュ

ユ」の入れ墨を入れる子たちがいるそうです。それぐらい若者にとってのある種シンボルとなっています。それは呪術的と言ってもいいかもしれませんが、ある種のスピリチュアルな価値が宿っている。

生産の場面におけるスピリチュアルな慰めと、スピリチュアル商品の消費が結びつくと、厄介な事態になる場合もあります。矢部史郎氏と山の手みどり氏という二人組の漫才コンビみたいな面白い思想家がいるのですが、その二人がこんなふうに言います。「例えば、ワンルूमマンションの玄関を空けてまっすぐ進んだ突き当たり大きなテレビが据えつけられ、そのテレビの上にアムウェイの洗剤がピラミッド状に積みまれているのを見たとき、恐怖だ。あるいは、きれいに整えられた部屋の一画に何かやばい空気を感じ取り、それとなく覗いてみたら、キャッチセールスで押し売りされた七万円の電動足もみマッサージ器があったというのも、恐ろしい。貧しい者の部屋にはしばしば、凶悪なブツがある」(矢部史郎・山の手緑、『愛と暴力の現代思想』青土社、二〇〇六年、一〇頁)

さらには、そのワンルूमマンションの壁には、これもローンで買わされたイルカ

スピリチュアリティ文化と社会

の絵がかかっているかもしれません。矢部氏らは、そのような若い労働者たちは「あまりにも多くを支払わされているし、引き取られるものはあまりにも惨めだ」と皮肉めいた言い方をしています。今日の資本主義においては、生産構造における労働者のあり方と、スピリチュアルな商品との間にこのような不幸なマッチングが見られる可能性は十分にあります。

生駒のスピリチュアリティ文化

ここまでは、スピリチュアルな文化のどちらかと言うとややネガティブな側面について、注意を喚起する方向で話をしてきました。最後に少し視角を変えて、スピリチュアリティ文化の可能性はどこにあるだろうかという話をしたいと思います。

スピリチュアリティ文化への関心は、今日ではマスメディアを通じた情報によって煽られている面があります。マスメディアを通じてスピリチュアルな情報が流されているのですが、マスメディアの情報の流れは一方的ですから、それに対する受け皿は

提供されないままです。また、企業社会においては、スピリチュアルな関心が労働者個人の幸せのためというよりは、企業のもうけのために利用されています。だからこそ、スピリチュアリティ文化のネガティブな面が浮上してくるわけですが、そうじゃないスピリチュアルな文化のあり方、オルタナティブなスピリチュアリティ文化というものを考えてみたいと思います。それは案外、私たちの身近な地域社会に見出せるのではないのでしょうか。

いま、私は生駒山の民俗宗教について調査しています。大阪と奈良にまたがる生駒山は、ひそかに知られた聖地で、石切神社、宝山寺、信貴山朝護孫子寺という有名寺社があり、今日でも多くの参拝者を集めています。また中小寺社も合わせると、六〇〇もの宗教施設が生駒山系に分布しています。それに加えて生駒山の水脈に沿って造られた滝行場がいくつもあり、修行のために滝行場を訪れる多くの霊能者がいます。そういう霊能者たちは、町の「拝み屋さん」と呼ばれ、たいてい一〇人から二〇人、多くても三〇人程度の信者(クライアント)を抱えていて、大阪市内など町中でひっそりと悩み相談や祈祷などの霊能活動をしています。教団のような明確な組織化はし

スピリチュアリティ文化と社会

ていないことがほとんどです。そういう霊能者たちが信者（クライアント）を連れて、定期的に生駒山の滝行場を訪れて修行をしているのです。

信者やクライアントの多くは、借金で首が回らないとか、家族が癌で治療の見込みもないとか、姑との折り合いが悪いとか、夫がギャンブルに金をつぎ込み困っているとか、夫婦げんかが耐えないとか、様々な生活上の深刻な悩みを抱えています。そういう悩み事を抱えて困っている人に、誰かが霊能者を紹介する。そうして口伝でで霊能者のもとを訪れるんですね。そうすると、霊能者は真摯に悩み事を聞いてくれる。ここが大事なところです。悩み事を抱えた人にとっては、悩みを聞いてくれるだけでもある程度は救われる気もちになるということがあります。しかも霊能者は悩み事を聞いてくれるプロフェッショナルです。

霊能者が近代的な相談機関と異なるのは、次の点にあります。近代的な相談機関は分業体制が整っているのです。医療であれば病院、貧困であれば福祉、そして人間関係の悩みであればカウンセラーというようにハッキリ分業が成立しています。ところが、実際には人間の悩み事というのはだいたいそれが全部セットになって襲いかかっ

てくるものです。家族が病気になって、その治療でお金がかかって借金がかさみ、親族や友人・知人に金の工面を頼っているうちに、だんだん相手にされなくなり人間関係が陰悪になり、夫婦間でも諍いが絶えなくなる、といった具合に、いろんな悩みがまとめてやってくる。霊能者は、そういう悩みに対して、個別バラバラではなく、丸ごとまとめて答えてくれます。人間的な生活の悩みに対して丸ごと応えてくれるというのは、たぶん悩み事を抱えた人にとっては大変心強く感じられることでしょう。

その上で、「あなたも滝で修行しなさい」といったアドバイスをする。これが結構効くんですよ。一度私も霊能者の先生の勧めで、滝行を体験したことがあります。滝に打たれるというのは、強烈な身体体験でした。夏場だったのですが、夏でも山の水は冷たく、しかも水圧は見た目以上に強い。それほど強い水流には見えなくても、水圧は強いんですね。それで、滝に打たれている間は、痛いのと冷たいのと頭が空っぽになる。頭が空っぽになるのがよいんでしょうね。滝を出た後は気分がすっきりしたように感じられました。

おそらく、様々な悩み事を抱えて頭が心配でいっぱいになっている人にとっては、

スピリチュアリティ文化と社会

滝に打たれて一旦頭の中をリセットする身体的な体験は、実際に効くだらうなと思いました。最初に話した占いが当たるメカニズムと同じようなものですね。そこに霊的・神秘的な力が働いているかどうかというのは科学的には検証できないことですが、現代社会において、霊能者に導かれて滝で修行するという体験でなければ救われないうような不幸や悩みのパターンもあるのかもしれない。そんなふうに感じました。

何人かの霊能者と会い、インタビューをしたのですが、何十年も人々の悩み事を聞き続けてきた人の言葉というのは、さすがに信憑性の重みがあるように感じられました。コミュニケーションに長けているという点もあると思うのですが、非常に魅力的な人物像で、こちらの話をきちんと聞いてくれて、その上で説得力のあるメッセージを返してくれる。そういうコミュニケーションというのは、私たちがもつと学ばなければならぬと思います。

生駒山で修行する人々がいるということは、それほど知られていないかも知れませんが、脈々と「拝み屋さん」の伝統文化は息づいていて、そういったコミュニケーションのあり方が何らかの形で伝承されているのです。それはマスメディアで伝えられ

するようなスピリチュアリティ文化とは異なる、言わば土着のスピリチュアリティ文化として一定の価値を持っているのではないのでしょうか。マスメディアの場合、情報は一方的に伝えられるだけですが、「拝み屋さん」の場合は対面的コミュニケーションがあります。また、滝行という身体に直接働きかけるような体験もできる点で、ヴァーチャルな情報だけではない強みがあります。今後、スピリチュアルな関心が高まれば高まるほど、コミュニケーションと共同性の機会をどのように作るかがあります切実な課題になってくるのではないかなと思います。

ただし、もちろんそういった小さな霊能者の中からカルト化して、何年かに一度ニュースで報道されるような事件が起きるケースも「ない」とは言えないので、そういったリスクにも注意しなければならぬわけですが、土着のスピリチュアリティ文化にもう少し目を向けていくのも面白いかなと思っています。

本日の話は以上です。ありがとうございました。

——二〇一〇年六月二五日——